

宿泊合同学習「Planning Trying Enjoying in おおの」

教育相談課

平成23年度から、福井県教育庁義務教育課が「不登校生徒進路応援事業」の1つとして、県内の中学生の不登校生徒を対象にした宿泊学習を実施することとなり、従来教育相談課が年2回行っていた適応指導教室の合同合宿のうち1回を「宿泊合同学習」として、義務教育課と共催で実施している。

- 1 目的 進路決定を控えた不登校の中学生に対して、進路意識を高めるなど社会的自立につながる支援を行うことで、学校復帰の実現を図る。
- 2 実施日 平成24年7月11日（水）～13日（金）
- 3 参加者 適応指導教室に通室する児童生徒
県内中学校の長期欠席や別室登校の生徒（主に中学3年生）

【合宿参加学年別児童生徒数】

学年	男子	女子	合計	学年	男子	女子	合計
中学1年	1		1	小学4年		1	1
中学2年	2	9	11	小学5年		1	1
中学3年	8	11	19	合計	11	22	33

- 4 主会場 福井県立奥越高原青少年自然の家
- 5 テーマ 「Planning Trying Enjoying in おおの」
- 6 活動のねらいと様子

○自己効力感を高める

自己効力感とはBandura（1977）によって「ある行動を起こす前にその個人が感じる遂行可能性」、「自分がやりたいと思っていることの実現可能性に関する知識」と定義されている。つまり、日常場面の様々なことに対して、「自分にはできる（できそうだ）と思っている」感覚であり、自己効力感が高いほど「社会的状況の中での克服努力が大きい。積極的に多大の努力を払おうとする。積極的に課題に取り組む。最終的な成功を期待する度合いが大きい。葛藤状況で長期的に耐えることができるなどの行動特徴が認められる。」（野坂・東條,1986）とされる。

この自己効力感を、合宿を通して高めようと考えた。

【1日目】7月11日（水） ※ 内は参加生徒の感想

○オープニング・リラックスタイム（Enjoying）

エンカウンターを行う。スタッフも含めて参加者の殆どが県内の見知らぬ生徒同士の集団であるので、出会いのワークで緊張を弱めることは重要となる。3日間を過ごすにあたって「居心地がいいな」「これなら安心だな」「自分の居場所があるな」などといった感覚をもてることをねらいとする。そこで、3日間を楽しく過ごすために参加者が守ってほしい「自分も大事、相手も大事（I'm OK. You are OK.）」というルール（境界線）を最初に伝える。



◎行ったエンカウンター

- ・○○の順に並べ！
- ・風船送り
- ・新聞ジグソーパズル
- ・割り箸でいい(E)友(T)
- ・出会いのビンゴ

声を出さないコミュニケーションから自己開示の必要なエンカウンターへと進む中で、緊張が徐々に解け、後の班でのスムーズな活動につながった。

知らない学校の人たちと少しおしゃべりして楽しかったです。意外と1年生の時ここへ来たときより、人とのふれあいがやわらかく、普通にできました。

【2日目】7月12日（木）

○エンジョイ with kids （ Trying ）

保育体験では、園児が「喜んでくれた場面」「喜んでくれた笑顔」に出会うことで、「自分が必要とされている」「自分も人の役に立てた」「自分にもできた」という自己効力感・自己有用感を得ることがねらいである。小さな園児たちとふれあうことで、活動性も高まり、働くことの喜びや社会の一員であるということが体験的に理解でき、他者理解や共生感覚の醸成へもつながる。



昨年度に引き続き、大野市内のいとよ保育園、いなやま保育園、開成保育園、篠座保育園の4つの保育園に児童生徒たちの保育体験を受け入れ

てもらい、1歳児から5歳児までの園児たちと一緒に活動した。

最初は、どう接していいか戸惑っていた児童生徒たちも、「おにいちゃん！あそぼっ！」「おねえちゃん！だっこして！」と園児たちが駆け寄って来てくれると、自然と顔もほころび、保育士さんの支援を受け、園児と遊んだり遊ばれたりしながら楽しく過ごすことができた。

最初は泣かれたけど、時間が経つにつれて、だんだん慣れて、泣かなくなり、抱っこしても泣かなくて、とてもよかったです。最後にはおむつ替えもしました。いい体験ができてよかったです。

○ガイド for future （ Planning ）

参加者と似たような挫折体験を経験しながらも、それを乗り越えてきた先輩の話聞く。自己効力感、モデリングによって高まる。「ふーん、そんなふうにやればいいんだ」「これなら自分にもできそうだ」「自分にもできるかも」という感覚である。「私だけがつらいんじゃないんだ」というピアカウンセリング的効果も期待される。



当日、3名の先輩に来てもらい、自分が不登校になった時の経緯、家族との関わり、どのようにして乗り越えてきたのか、現在の様子などを話してもらった。

その後、3つのグループに分かれて各自が聞きたいことを質問し、共感する場面も多く見られた。

話を聞いて、いろいろ心境とかで重なる部分があつて、それでもちゃんと将来を開けていて、すごく自信が持てました。これから受験があつてすごく悩むかもしれないけど、励みにして頑張りたいです。

【3日目】7月13日（金）

○トライ in nature （ Trying ）

森の中で、自分で遊びを見つけて遊ぶ。自然との関わりからエネルギーをもらい、開放感を得ることをねらいの一つとする。参加者の多くは、自然の中で活動することに慣れていないことが考えられ、スタッフが緊張や抵抗を弱めるような関わりをする。第二のねらいは、森の中で自分がしたいこと、できそうなことを自分で見つけることであり、この場面では、敢えてスタッフの声かけをしないことが望ましい場合も考えられる。第三のねらいは、体験後に開放感や楽しさに加えて、「こんなことができた」という感覚がもてることである。



当日は勝山のノーム自然環境教育事務所の協力を得て、六呂師の「ハックルベリーの森」を舞台に活動した。葉っぱを観察したり、森の音を聞いたり、草笛を吹いたりして、ゆっくりを森になじんだ後、のこぎりや鉋などを使って、ヤード作り、ターザンロープ、ハンモック、ブランコ、かまどを使っ
ての炊飯、豚汁作りなど、それぞれ思い思いの活動に取り組んだ。

学校でこのような活動を計画する場合、多くは事前にメニューを提示し、誰がどの活動をするのか、また、炊さんの役割分担を決めることが多いが、今回ここでは、事前には何も決めなかった。自分で活動を選び、チャレンジし、「出来た」「やれた」という達成感を得ることがポイントである。

最初は虫がたくさんいていやだったけど、だんだん慣れてきて、自由時間のときにヤードをつくったのが楽しかったです。生き物の役に立つといいなと思いました。

7 事業の成果

(1) 自己効力感尺度から

今回は、「具体的な個々の課題や状況に依存せずに、より長期的に、より一般化した日常場面における行動に影響する自己効力感」(成田他, 1995)である特性的自己効力感を「特性的自己効力感尺度」

(23項目を5件法)で測定した。この尺度の13歳から17歳の平均値は115点満点中73.8点(得点が高いほど自己効力感が高い)であるが、参加者のうち中学生30名の事

前調査における平均点は67.1点であり、一般の中学生と比べ6.7点低いものであった。

【特性的自己効力感の変化】		
事前	事後	13-17歳平均
67.1	71.5	73.8/115

それが、合宿後の調査によると、平均は71.5点と4.4点上昇しており、一般平均より低いものの、今回の合宿は、参加者の自己効力感を高めるのに有効であったことがうかがえる。

(2) 活動の自己評価から

今回の合宿の主な7つの活動について、「楽しかったですか(よかったですか)?」の質問に対して、5(はい) ⇔ 1(いいえ)の5段階、得点を5(100)、4(75)、3(50)、2(25)、1(0)として自己評価した。

【活動別自己評価結果】

	活 動 内 容	平均値	標準偏差
1	オープニングリラックスタイム(エンカウンター)	86.29	18.07
2	プレゼント for Kids (保育体験事前学習)	83.33	23.97
3	エンジョイ with Kids (保育体験)	92.19	16.11
4	オープンクッキング (野外炊さん:焼きそば作り)	94.35	14.01
5	ガイド for future (先輩の体験談)	94.17	10.75
6	トライ in nature 事前学習 (自然体験事前学習)	95.16	13.57
7	トライ in nature (自然体験)	91.67	14.88
全 体 の 平 均 値		91.02	

すべての活動の自己評価の平均点が91.02点と非常に高く、参加者は活動に「とても楽しく取り組むことができた」「活動に参加して非常によかった」と考えている。特に、この事業として最大のねらいとなる「ガイド for future (先輩の体験談)」の自己評価平均が94.17%と高得点であったことは、今後の不登校児童生徒の自立に向けた活動を考える参考となった。